

益
士
凡

庫文官政太			
		一	和
		一	書
		四	
		九	
六	〇	七	
五	二	一	
冊	架	函	門

庫文閣内			
		一	和
		一	書
		四	
		九	
二	六	七	
一	函	冊	
一	架	冊	類

内閣文庫		
番號	和	11497
冊數	65 (25)	
函號	211	302

二
十
五



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM Kodak



文教
庫印

皇
清印

南
清印

國と有主詔
兵
秦の務公越
踐の類是也
不道ありし
得地ラの禍

二千五

内一二七九〇號

國と有主詔 兵 喪師の禍小みろて或ハ以テ霸を
秦の務公越 踐の類是也 不道ありし 得地ラの禍
大小一也 或ハ以テ七焚ノ靈王有リ 浪王ノ類是也 其
君徳を廣クシテ 小邦を以テ 一旦土地を廣クサシ 宣
永リ有ベク 人ヤ 兵を強ク 下ル先ツ 民を強ク 治め
民の強キハ 徳廣クシテ 民安キ あり 地廣クシテ 治
善トシテ 事なく して 民の安キ あり 治を善トシテ
大王 狄大王 民を安キ 兵を強ク 土地を治メ 小廣カ

多うともあひはるま作らぬ此寺者ハ河崎の四門
堂とて今此用山堂乃地子ありて傳教大師藝田の
まゝの電の〜れこの多門をたぬし大黒天乃像を
彫して並ぶ安〜ま〜後藤河上人のまゝにせ
らま〜れ〜藝田の神助の信々今この平とる河津院
佛の立像を感得せ〜れ〜とらん上人河崎の西向を
築か〜て堂院と〜之所道場を建て圓座とあり
あひ〜まゆの鏡と〜と榊御前乃ニ夕葉の榊樹

を〜し〜方丈の前ふ杉のこまり新後拾遺集八
部秋よありて萬井の寺ありてとまらむ河崎ま〜と〜信り
ま〜堂の中は後〜ま〜

河崎上人

河崎上人のまゝにせらるる〜と〜

後系師金蓮寺ふ〜れま〜と〜れ日の像を彫〜て
母寺ふゆ〜れ〜徳小應安三年九月二十日ふゆ〜れを示さ
と〜と〜と〜
けまの島氏將軍大旦那 普廣院將軍教義

富士河原のつれけきふ入りせゆりて運致しぬい

一 浄土前小 若かと故しむしむし道場なり

堂内立像の十一面観音なり 聖徳太子の御

一 荒廢の後々の法親王の御建之の御

一 像圓福寺あり 聖徳太子の御建之の御

一 又圓福寺の鬼簿をえしは牧女の名あり 牧女

一 小林の清浄寺に牧長清の御地なり 其御の御

一 年八月二十日 聖徳太子の御建之の御

一 一 聖徳太子の御建之の御

牧與之丸衛門尉長清ノ法名

長清院 梵阿弥陀佛

信徳院殿 善行惠長大禪定尼 長清之室織田信長公之妹

貞室宗元居士 長清の男牧長石衛門尉義盛ノ法名

寛永二十年 癸未正月二十二日 八十九歳

高明妙勤大姉 是ハ長盛の妻浅井氏カ、宗元居士

富家臣室毎小盛饌滋味を好し山の珍水は錯と窮

少きことなき等し我 國の益土なきが如く春意使面をを

ふとし人精絶殊詭とくさつとん今今京師東都盛

くまを猫やて人なりし淫をがしゆし

○黄庭堅の送王昂詩に 江山千里俱頭白 骨内十年終眼青 とはく

○まゝの注者以て此ノ對極めて妙處ありをす前輩多

り使之 別東頭併白頭 といふ花杜也 看鏡白頭う知 我が花平生青

眼為君 とはくまゝの東坡也 山谷ノ注猶多二松 名有異云

嗚呼旅客子江山の遠きを隔しては白頭よ至 一期あつて相見青眼を用り唯く恨むべきは黄

泉路上の客の青眼下よびあつて秋月寒水誰こと 共に昔の江の強夢に獨り白頭

○開元通宝の錢ハ歐陽詢の行書錢のうに二月の

やうかつては是ハ唐の高祖の后文德皇后の仇形か

かゝる後世錢文宝の字が用ゆる申開元錢の始と

陳仁錫云へど輕重大小乃中分得る錢として古今皇

之故ハ母鑄る古錢を用りて開元錢を第一にして其の

の印を得ん者を 我國の古錢 万年通宝神功 用と時珍云へ

元の製に不異なり一存人ありて茶に古文錢を用り

こをあらは係鏡乃中神功等御用もまじに

○今度朝鮮の聘使を御用もまじに柳宮殿門
重修のゆきありしとるまじ此神車寄を中門ノ
席と稱し別に中門と立させ候も御用もまじ
と今より内車寄と呼べしより候也と云又韓人登城
の時と諸家或は束帯衣冠狩衣の差のづも由は狩衣
の時諸大夫以上の其のすかご等一はへ指貫の色は命じ
にまじらば

三家、禁色 侍従以上濃紫 四品淡紫 諸大夫、淡縹

○勝速日尊 天照大神ノ御子 饒速日尊

高天原誕生 天香語山命 尾張宿禰等祖支流甚多 是ヲ天孫
母天ノ道日女命 柳部連等祖支流甚多 母御炊屋姫命

宇摩志摩治命 武徳ノ臣 母御炊屋姫命
此ノ兩神ハ神武天皇東征の時大勲功ありしと云
ニ流の子孫も多しと云朝家ハはまらふ

香語山命とハ高天原小川の神名天降たりしてハ赤粟
彦命とハ又ハ高倉下ノ命とと稱せしタリ
男子の美稱とハ大人畧小しハ長危の稱号なりハニ名

うしゆど各語いひ高山をいふ事ふして高座と意又四し
きや

○饒速日尊神殞うしくし後其ノ神屍を高天原に歟
めたまひ豊葦原にハ廟陵なるまに夢の教ありて
其ノ服御の神衣帯手貫の之物を鳥見白庭邑小葬
し歟して以テ此ヲ為墓と天孫本記ふあり後世日本武
尊の神墓處とにありも此ノ類也我國古ハの風俗
とらんぐさか也

○神社のいづま昔に摩志麻治命天孫の十宮を神
武帝小歟し神捕とて立てし奇しき事なりこれを
五十掃とて今あるも呼ばし是五十垣の事あり

○神武帝即位の始メ天ノ富命太玉命の孫 諸の奇部を
率てて此種の神宮を正殿に安メてまつりたまひし
祭官の御方なり天ノ孫子命児彦命の孫 神代ノ古事
を養へたるひしハ朝政を執る事なりと仰て攝
旅の權輿なり摩志麻治命内物部を率てて神捕

登_レ殿_カに威儀を備へたるは常_ニの儀也後世迎衛の起_ル
所道_ノ臣命来_リ目部を帥_ヒ仗を帯_シ官門を衛_ス
か_ニ外衛乃_リ席_ニ坐_リこれ_ハ我國_ノ百官_ノ之_レ序_ニ神祇_ノ官_ノ大改
官_ト次_スと_レれ_ル八_ノ省_ノ諸_ノ國_ノ之_レ儀_分め_ルは_レ政
事_乃ち_レつ_レる_ニ為_ナり_テ六_ノ衛_ノ之_レ重_キ他_ハ小_ノ異_ヲめ_ル由_ニ
か_ニ人_三れ_ルに_レ定_リ多_ク事_儀々_々と_レる_ニあ_ルは_レ乃
官_異邦_を言_シて_レめ_ルを_レ置_多す_ニに_レあ_ルは_レす

○ 世俗霜月十五日を良辰と_シて_レ髮_置鬘_着え_服具_とす_ル
カニヨキハカニキウイアラヒニ

等_々の儀_々を_レ多_ク事_儀々_々と_レる_ニあ_ルは_レ乃
欽_定ま_ル小_ノ神_武天皇_踐迹_の年_{十一月}庚_乃日_祈壽_壽
祇_の祭_ノを_レな_すと_レた_まふ_ニ旧_事記_長曆_の日_神武_天皇
元年_{十一月}丙_子朔_と據_此則_庚十五日_也これ_ハ百_王乃_大
祖_鎮祭_をな_す始_たま_す日_をれ_ハ傳_へて_日出_度も_レに
此_ノ日_を月_い傳_へる_也
○ 鎌_足公_子藤_原氏_を賜_シ神_子不_此年_乙未_時ア_を
朝_臣之_賜と_シて_レれ_るは_レア_カと_云ふ_人あり_梅依

が侍に錦足公の中臣連あり故に藤原の戸ハ其
時連し又大蔵冠位藤原錦足連と稱し
べしと或は堂上家作せられしと云

○元和の末へ我公室乃諸臣いとも事ずしかく納戸

まされし人かくり曲淵某八右衛門
法名宗仙何となく此

調度かとりけしり出納せし大蔵公御上洛

元和九年の御時公も此よりあきし内侍山下大和守ノ

事相應洗殿御妹および竹中源助後室
志水加賀守ノ妹

隆正院隆正院ノ伯母此
師ハ秀次公ノ母ニシテ文祿四年
死ニシ人ノ妹トカヤニ介して納戸ノ雜事ヲ

其後羽鳥平九衛門山田金丸乃成田藤原川各ニ蔵系
一白石玉りし始りし納戸役勤トト云々此語

○或人見起請文を熊野宝印乃裏小書りしと菅長記云

小之く久し凡俗之請仕る牛玉を用るも中古某の

事ゆかり分りし熊野の牛玉用るる如何し曰く余先

子以為當時天下熊野の常御下り其の地母異なりし

故に彼ノ社の宝印を自れと後乃知る熊野の神を

以て神を破者ヲ討し其神をすしハ佛氏小出て其ノ説

めりしと後優婆塞曰り間浮提守護ノ神一ツハ

呼然や否やのしき、詳かにせよ

○美濃國武儀郡也、師也、毒海師也、小華山といひ、
僧也、毒海薬山の名對れり、し、彈子ハカク名也、
一佛經也、てい、ちま、く、も、あ、ら、わ、か、し、れ、り、

○悲惠戒佛 佛名經あり 迹昆摩羅尊者 十二位

蕪染呼經 漢音小よめ、蕎麥粉トメ、 鳩摩羅天 密家かく

子流水長者 最勝王經也、吳音小よめ、これ入りと、きこやけ、吸長者と、あ、海、つ、あ、い、か、り、

○心華の文句、小鳩、繁、茶、鬼の譯語、を、凡、と、い、ふ、の、鬼

の、陰、冬、風、の、と、く、ゆ、り、時、ハ、肩、小、置、キ、坐、せ、れ、と、い、は、れ、ハ、
お、ま、い、へ、と、れ、を、繪、小、か、く、い、と、お、う、か、う、

○明珠、宏、取、述、の、正、訛、集、異、邦、乃、僧、老、爺、と、呼、フ、尊、祇、
堂、一、和、尚、と、い、ふ、こ、う、極、し、た、と、い、ふ、乃、訛、を、い、へ、と、老、爺、ハ、
官、府、の、号、僧、乃、宣、一、に、處、ふ、あ、ら、ば、然、ら、ず、い、は、れ、を、い、
祇、呼、と、い、ふ、お、う、一、我、國、知、術、ヲ、射、の、師、を、和、尚、と、
俗、祇、を、れ、も、か、ら、し、ふ、と、い、ふ、一、と、れ、茶、道、の、名、あ、ら、者、禪、ハ、
參、一、凡、顛、漢、の、氣、象、あ、ら、し、と、い、ふ、一、と、れ、和、尚、と、い、ふ、一、と、

師より物ありては、其の者も和尙をいふは、其の如く
しるすべし

或人問世に魚藍觀音をて描り何れ乃經軌の由り
て之をいふ是れ収經儀軌の像ありす唐の鳥部
海少し元和十三年乃半くして其の語漢像贊に
法華持驗記等にても一巻、普賢乃本現とて、佛
書に、く、其類多し

○又同越後國小廣智の遺跡腐すしてありといふ

ヤ何の曰リ異邦も亦此の例而くは、え也五雜組めと
あり、や、に、是也唐の明列の傍邊端、形質の
定東山より明朝小橋、真身院と号して、漆
し、綜飾せし骸軀を安んじ、法華持
驗記中
因、去り六廻惠能、話列南華、其、法達、の、法華を
誦、其、所、為、に、説、く、偈、曰、り

心迷、法華、轉、心悟、轉、法華、誦經久し不明
其義作、能家、無念念、而正、有念念成邪
有無俱、不、計、長、御、白、牛、車、有念念成邪
嗚呼、よの誦經、有、多、れ、り、能、く、於、相、雜、相、於、室

離空ラ一念心閑り名況ンヤ目蓮ノ徒ヲ名只ノ法華ノ經
ニシテヤ好佛の樂トシ我物を益メシ何レの開佛ノ知
見ト云フん咄哉

○ 帝都近境内及び院の御料と臣下地並茶地との境祝

小禁裏御料 仙洞御料等書シト然ルレバ

山料乃御断の鳥羽の御料等書キ改ムル由目ノ洛

洛中高家の招牌に禁裡仙洞乃文字書リベシ

と辛卯の七月 關東の有司 大久保大陽守 松平石見守 海道以西

ニシテ是今度朝鮮の信使^{ライハク}來朝の取我國邊世

・ 非俗な草させりやまやうとぞとまきの御倉院

乃沖處分なり信臣の領地とらへ書くるの條あり

るのなを正させりや昭代の曲別をけり

かゝるを多し

○ 本家の三巻曰り蔬食の義論りぬり曰り清曰り潔曰

芳馥曰り鬆脱のことと云し又レ重因滋味を人負り啗

こ人倫の本志を衰しゆるに飲食の人みし君子のや

しと云く唯レ一四の荀苑羊瓶の茶とれ貧家乃

一幸なるは歎

○我辺世乃俗皆禮納束の禮と結納とよぶ梅と柳と額
會乃壽の字乃條下七吉人以柳結納人ニ爰曰テ為
壽ト云結納の熟字いあれども訓と音とに呼ぶと
是なるにせりふかあ

梅と柳に也キ世まき替成定むるに婚の力あり
酒者おしひ衣服等嫁婦家より贈るは言入と俗よ
いひくくとい入句の意こそねねいひるれと記し
リ結の字とかくあやうく貴人ト皆結納の字
や用ひまじりぬとていふゆめ州とていふおこのまき
や時俗よぬいふ亦其本成い知るあつべきまきと

○三浩然詩小夜来凡雨色

春眠不覺曉 處々聞啼鳥
花落知多サ と他々いふ

見て世世有盲子かといひ一平吹録よあや草ホ子

小鞋朝、唾御衣春時替者と共ニ晋陽のあまびーに

替者詩ヲ吟テス 結韃和袖縮絲韃也逐王孫ヲ出晋陽

馬蹄響處無芳中 鶯古調時有綠楊
休道不知春色好 東凡桃李一般香

いひまきくといひ音人の詩ときさく信り吾國成り
といひいひ音人
夜の多れ忘張すはこれかといひとら現物めと所なり
とくといひと教聞小達とて夜の雨の撒ると後小松院
号とて多しなり此歌のまきと眼よとていふは後の
盲人楽のいひぬきふるなりとていふはけあつと

○知恩院母舅主の宮尊統法親王御受戒円理大僧正御戒師との後義山を

師命ふまひつて法義を教授しはつてをらまひし御不
縁ありし時より一もあはれ大僧正が御對面ありて
我をみあしきまの道は乃法則御正し吉永の流を
再び清くせむくおぼしき又お師の正義いしりしお
とて鎮西白旗の吉凡に背あはれしとある寺に御書
日記のゆめありしむかしく御終焉の期ちりし丹
一くをおがめしめありしと足下我か素志が結ま

空誓僧正覚おとび義山師等々をうら心をあてて関東の傍正

増上寺は義山本宗乃流弊御修り佛祖の慈恩御謝し

さしこのせいのころはうきものありし只この法の相續を
りこのおがしめすといふしと御遺言ありし院
内より御使あつては御おごりし御せせむかとおんせ
しおがしお不定のちしむおぼしきとせむしおに
かくふ御山乃紹隆を江敷慮小かけせしとあもく
法燈の光り御流をせしとて其後ハ他事なく御念

佛せき海ありしものありし聖衆の来迎を感念せしめ
しるがひがふ入滅なりしときと今感む月十八大師重
謚の詔をばさそむい初會の障なく行かせるまむ
五月十八日淨土小泊本ましくりてを共に觀自在の應
化とて中あつと

白一廿九日淨土送られ御來の 台命ありし 定臣
兼向一 清山群をあらせりやがて一心院の上への山み
おさめり後清山群の清山遺言にまうせ一七日如法
の別時念佛の修せしは侍り大師下兼知の御所の
沖齋建曆の春乃も及ぶあ光をかくし宮の後水
尾流の御流意雨と法界小西へ雲かこれとせ

たまひしかとあつた傍のりしとて八月廿
九日御百り日の志度めし由法人ありしときと
光陰のうつり好もあつたれをけりてなり
御所縁となく奉りて遠師の礼文を唱へ
一辨の番に捨しとて無景成王院の宮
智恩院の前川主高之法親その内事とてありしと
あつたりしと

まじりての御所の月めりれりて代りて

○ 日蓮黨乃 備學解しとてまをて任持せし類と誦
經者として讀誦を賣りて法念しとてすしとて使しと
あつたりしと 祐しとてしとて茶羅尼
しとて誦して祈禱を齋しとてせしとて

と云ふ口給りし説法も類と流蕩りて換カヒ本ホンが
まほまの説者といひて諸る此法も幸ふとに説義し
我日を金何れと定りし利を求る事多し一彼家母
と心有ん俣々甚るぬと信り澤々宗三十年前まで
かゝれ風ありしり蓮流り村師漢め致ひこの説ハ
京東留學師多く出来てまゝの長短も備せ説法
一自ら其説を尚不徑論乃疏釋小く流大際架
乃ナウ丑生ウウセウ小似て戯言と敷演フエニ一茶諸乃卷を張と信

と声多りの説優の頼話をもまの業ゆありゆとて同
鳴呼釋教変りし俳侶
と漢ありしむらゝ安住院の都ト聖覚セウケツ都ト權僧ケンゾウ人子等住者
能り説の大唱道すと唯まかゝると人のこととまたりし思
こゝろりかゝりまに在言にハ信りし獅子谷のれ讀念
佛悲哀の声破りししてとゆにも真佛乃秘言
とて鄭衛の末音とすと師鍊ハかゝりし況や道
場乃講席にのりし差謬の語を以のこゝろと下
流の戲言なりしと根貧の謀をわると法師ハ一塔之
めぐりしありし

○龍化傳小日像又忠晴と書ハ造言あり平賀の本
寺縁起小池本門寺の崩祖日詛日蓮上足乃方子
日蓮に隨流し後一比丘尼やとてし書と名

を妙明といへ下総、國平賀村乃木氏の娘が、これ
知し、子に生しむ兄、其日像と名づく、京師乃木顯寺
乃木祖の、弟を日輪といふ、地上二世の住持ありし
より、下総國中山乃木華經寺の、田山善平の、日岸と
妻帯ありし、中、彼ノ寺の記、小詳あり、日常、立川
邪流の密法を信し、祈禱をも、とせり、今の蓮徒
々祈禱ハ、此流の、日蓮、四恩抄、日蓮、いせ、妻
帯と帯せしと、自書、い、子、母、妻、不、似、多、者、と、何

一や生、宋、統、院、僧、都、真、起、の、言

○道の本躰学、の、定規を辨へ、あ、ま、窮理、居、放、の、教へ、子、隨
ハ、五、倫、ヲ、捨、て、一、身、の、利、ヲ、謀、ル、を、異、端、と、以、不、破、む、也
く、異、教、ヲ、依、り、し、在、細、考、め、と、い、ふ、と、と、ね、し、つ、ま、ひ、不
と、し、合、点、を、あ、ま、あ、ま、と、い、ふ、と、い、ふ、の、ま、じ、り、は
を、ら、ら、り、て、疑、議、し、ら、り、か、ら、直、め、こ、具、儀、立、て
一、法、小、物、着、し、ら、り、し、其、ノ、物、人、の、地、め、止、り、て、ま、じ、り、こ
修、飾、と、ん、と、す、り、と、ら、り、其、ノ、こ、氣、の、偏、り、理、ウ、ま、

ふかぐに涉るるれをうしとありし自勝他者の念も況
没し中をうめりてとて即宗有証立つるれも諸
人を我門より引合せし其門より入りし者有る所此の極
ちれ味も味もなきべし一卜度眩し音呷も引き
て其門より入りて他証なきが書籍名目言語も一統
をきて井蛙の小見小智懸るれい又各々自見あり
て同門の中身と諱し自讚毀他の論も造り強
流を分りてこれに教諸人自らまよふかたなる彼

言として使一偏よありし互ひも我れ物くして他を言
半仇讎のうし今世儒学乃士と大察此の意と凡俗を
まぬれらるるや偏むる甚しれとの教

○ 佛 教の顯ありる察あり 禪あり 顯あり 別あり 察
小唯雜の分あり 禪の佛祖乃極あり 道半 滿の科を
異にすといふことと云ふ 理智の辨理 辨性といふ系
一色心実相を同し入る高のこ然に一流小批すか
顯を以て密心抵し密を以て顯を侮し 禪を以て

頭密以慢を各自法小着し一流派を併し己我の私をさ
ことん秘迦え師羣迷を憫念して古儀小遣ひし北を施
す善巧方便の川小悲しし飯元不三乃地を乞ひ就中小修ノ
日蓮、邪流の如きを指しあさあし法執あくまを甚しく
凡佛廻乃用化を非謗し家社乃神祇を蔑小し王國
の法禁ヲ犯入他宗成んるるの怨敵の如くても宗に
流義のれつとて鬼畜乃如く悪く骨肉の親とまへこり
よるゝのをも頑固とて巨横とせりつゝ毎つゝかひせし

只と他の極那を欺き誑しして己小随うりめんしとを乃こ
ありしとせり是他なり邪見の流をこぼして其毒小碎
何る故に其教乃實否が論とふもあをくこりつゝ
何る及た理めをさるれもあはれとてさうのし一由さる
佛法者の心入とてこりつゝや一はん信小條
多うこそ名使の五才ありつゝこれに彼の一はんに其利新
當り流業つゝとて物國の一撥のやりにかきあつて他宗よ
めつゝ色まじつゝと言ふとありつゝもて無我也言の氣氣
さうにかく貪着にせし拘氣の勇をたかくしつゝつゝの癡
鬼小着せしれしは似所誑小し極極の煩ををりす
伊優の臉丈小等し制し名律我を業めめくせり古
りり此宗所の坊主も強梁不義を以て刑罰せり
何る者六百せりめしとせりもんとて言ふ英哲にして
徳義あり者ハ人々聞つてつゝ手取つておしつゝ

○ 天正七年五月日七 江戶安土慈恩寺乃淨嚴院宗論列座

之次第

北之九座 洋土宗

正福寺、靈巖玉念
西光寺、聖養真安

南之右座 日蓮義
妙覺寺、常光院日諦
妙滿寺、久遠院日雄
頂妙寺、前住日鏡
妙顯寺、大藏坊

東之上座 判者三人

南禅寺、楞嚴院、鐵叟景秀、長友
南都法隆寺、瓦坊法印、專覺
金華山、十界因、景居士

西之下座 聽衆

川三井寺、学道三人

東大寺、真福寺、碩徳三人

安土、總見寺

詩寺、沙門

正面 御名代

奉行 三人

織田七兵衛尉平信澄

菅峯丸右衛門

堀久太郎

長谷川竹

刑四討

頂妙寺、日鏡

妙覺寺、日諦

建部紹智 大膳傳助 不傳坊

其他邪徒多し、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

日鏡、みり乙、まゐ、らる、れ、早、作、事、の、知、り、あ、り、あ、り

○ 或人間法華に諸法実相と説き般若小真実不虛といへ

る、然、小、朱、子、大、学、序、小、異、端、無、定、上、の、中、也、何、の、日、

吾、之、實、乃、字、此、味、上、を、為、る、や、凡、虚、端、の、難、か、く、四、氏、日、册、

しつて行はば... 正味を言ふ... 夜氏所謂可説...
しつて行はば... 正味を言ふ... 夜氏所謂可説...
しつて行はば... 正味を言ふ... 夜氏所謂可説...

○或人曰吾... 食の穢き... 事誠當時誰...
○或人曰吾... 食の穢き... 事誠當時誰...
○或人曰吾... 食の穢き... 事誠當時誰...

○... 天子元正乃... 世之席食の穢... 小其ノ穢也...
○... 天子元正乃... 世之席食の穢... 小其ノ穢也...
○... 天子元正乃... 世之席食の穢... 小其ノ穢也...

○ 契曰ハ八剎宮造禱ハ之別長篠入河出陳沛凱陳ハ
後之の學あり信長公某田蘆毛ぞいふら神もふ
奉せりといふ

○ 五時之兵衛ハ甲列狼人組ノ中也天正三年ハ
流乃人あり

○ 破邪前卷之卷ハ肥後國延壽寺の月成ハ本願寺の
法流違變ハ半知ハ之訶ハ豊前國永照寺乃西吟
及答往復乃論あり兼應二年三月より六月に

至テ五小論也一書也

○ 凡ッ本願寺一流ハ本寺の掟を守り未ハ小ハ
異義ハ立テ自見仰立テ法説す
す時法ハ遠ナリ
淨土宗のめまありハ
御友ハ台家密家禪子乃話混雜して元祖ハ
本意と失フ事多シ

唯解義不救業苦 盲龍經

偏ニ修理ラ則滞ル寂ニ偏ニ修シ旨則無悲矣 華嚴經

信理者ハ執 唯心之淨キヲ而狹ニ小ニ西方ヲ修スラ者解

執持名号ヲ而韻^{ミツクシ}預佛性ヲ 淨土五經舊序

○或日中世乃書小五本^{ナリ}七本^{ナリ}分^ルと^ル膳あり^ルと^ル

ハ^リ少^ク七^五之^ノ事^{ナリ} 予曰リ膳部家ニ用^ヒと^ル五本^立ト^ルハ

以^テ幸^ニ乃^ハ厨^ハ九本^立なり^シと^ル其^ノ儀^ハ貝^等甚^ニ美^クと^ル

し^ハ毎^ク乃^リ以^テこれ^ヲを^シ礼^家饗^膳と^ルあり^トし^レれ^ヲを^傳

傳^スと^ルと^ル繁^多あり^トし^レれ^ヲを^客ス^七五^之ハ^只之^ニ膳

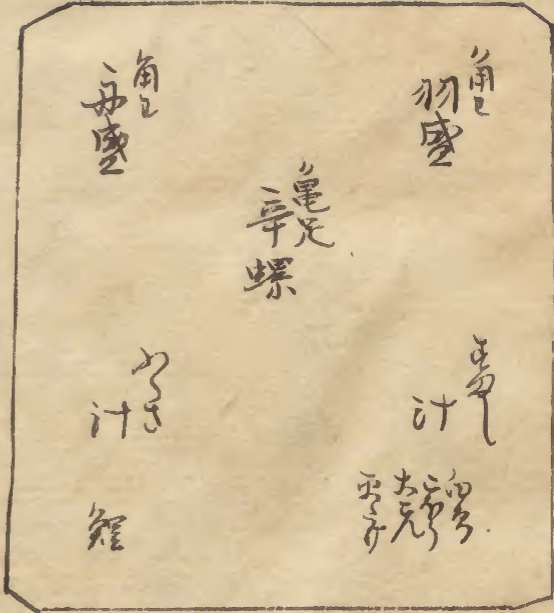
多^クの^丸少^ク記^ス 乃^ハ歎^ク之^ノ童^蒙乃

本膳 小道具表金裏銀 亀足土器金漆

二膳

香物	小角亀足 かほじ	小角亀足 かほじ
塩列	燒物	大 ^ナ り ^ト
	三度	湯漬 著
	五 ^ハ 志	土器
		湯漬 著
		小桶

張た ^ト	亀足 貝 ^等	汁 ^ハ
汁 ^ハ		汁 ^ハ
か ^ハ す ^ト		汁 ^ハ



大際如此こり時ハ先ニ献の式ありし七五三ニ君へ後小
 九種乃菓子等ありてハ膳部家の知事なり
 當時ニ條行を乃清ニ時ハ清ニ献七本立餐の
 清膳ありしとあや其畧されと云

初献

二献

けつりもの 内裏雜 清しん けつりけ 貝盛 由をれのあ

内裏を内土巻 清鈍子 由加 清生り物

三献 三ツと力 饌具繁多故畧之

七ノ清膳 清本膳七種 清二四種 清三九種 清五三種

清五地紙壽盛 一六種 清六二種 清七二種

清土器物ハ 五種 清菓子ハ 二種

○ 薬心五味四氣七情ありし七方十劑 君臣佐使浮沈

らりて調合し猶損益して病を治へし如く此痛
醫疾乃劑差休戚乃開取をわらひしれ方の激否
安危乃わらわらざる慮しむ滅裂にして誓しこと
く凡そ業種乃真贋新舊をとり毎にばしし事不療名を賣
て活命し人の死生を月也革多し丸小方御處を相乱
小毎母小劑を用ゆとれ病疾瘳を病ゆゆ見かられ
と一夫劑をよべて適中せよお付買害ありん事お
とれ目らり他乃礼意薄をいへ業抑蓄をいへるあり

嗚呼良醫の趣向をえりて事遠し近し又京師東
都及び一兩の都會醫師人各此方劑をいへる業
箇の業ありて病疾瘳して人を全死買しむる業此方劑を
害せりて命死瘳をのりて事多し人ありて病疾瘳
し者へし事多し此醫多くは黨を結ひて一八乃
病を見て已る事小集を議しこの次きよは病疾瘳
るに病疾瘳を救く族は事小国賊といふ事あり

○ 洛東智恩院乃山号花頂といふところ一夫と山別峯
乃號をいへるあり

天台山修禪寺北境の一峯花頂といふなり
大師の傳業にえり

○ 智六大師入滅の時侍者をして法華と無量壽經

と唱せしめ最後の用意と一語讀して曰

法門父母 惠解録生 本跡曠大
微妙難測 輟介絶絃 於今日矣

こま法華之味の讀あり

四十八願 莊嚴淨土 華池宝樹
易往無人 火車相現 能汝悔者
尚得往生 况戒惠薰 行道力故
矣不唐損

こま念佛之味の讀あり

法華ハ弥陀の心法也養ハ弥陀の心地なり大師之れを
とんて終焉乃所到とせし法我國傳教 大師も亦法

華法を以て宗とせしき弥陀を以て觀を 悟せしを滅
後其ノ塔を極樂淨土院と号し日蓮堂天々が祖とし
しと云ふはむくは何なりや

○或曰吾子さば小當国乃若音摩心を一事心あり
記しし今乃真正律宗ありあり有り八華のニ片鴻
世村の音摩の松とよま未あり其処の山の名ありと諾乃
こ碑小傳より衆列篠田の森乃木の故事と一般也
し不尤母と云ふひり時彼の松樹のりしに母の意

のしんかつかさ

あつゝ音聞山のりま

あつゝ音聞山のりま

とら音中凡之の説も何らもあやふし

又此ノ里小吉原と云ふ所ノ野原の根子熊坂ノ長靴に
一不にて海道の馬と盗之れをき一不にて
其地の地藏堂あり是れ乞食乃地藏といふ長靴
白馬を盗て赤いやくと黒くと書きしり靴は
馬乃もつらと云はしり地藏といふ事此の地藏
も盗人母と云はれり此の地藏は悪人十公地
村由長靴ノ馬場といふ事ありしや一不にて
これ長靴ノ物見の雲やい盗める馬と盗
と云ふ事ありしや一不にて

○ヒジツと云ふ説としてその祿ふ一我國亦乃此

すいりて盗人の事といふ事ありしや一不にて
の事儀ふれり候松も違ふ一不にて八月九日此
凡由此所といふ事ありしや一不にて八月九日
と云ふ事ありしや一不にて八月九日
篠木、庄出川村小住者常呂利惣八といふ盗人
是と時倍久つといふ事ありしや一不にて八月九日
貪婪にりて盗賊なるを勉む戦國の阿村落あり
こそ人を怒りしり者といふ事ありしや一不にて
みおねといふ事ありしや一不にて八月九日
乃愛小遊まきといふ事ありしや一不にて八月九日
多あ惣八といふ事ありしや一不にて八月九日
希有の事といふ事ありしや一不にて八月九日
事といふ事ありしや一不にて八月九日
いひりり候ふといふ事ありしや一不にて八月九日

聖乃字に訓ししりれり僧ハ事れせしにみれり
記す

○フシハカセニハ常ニ奏乃和訓ハカセセ博志をこす返
ぬ只詔をく拍子乃轉語あり
フシカセトハカト
シヤウニトハカト

劉氏カ鴻書以高麗之字ハ始リ於其子ニ日本之字ハ始
於徐福ニ云
梅すりに我國文字ありしり神武帝の前
りり作ありしりあししん書と甲子と記す

あんや何ぞ孝靈天皇の清字は文字始といふ
はれせし聖學其正を傳へる世宗波のり乃ハ在
りりり祖とす

○或曰り陸奥乃塩竈の明神ハ長髓彦ハありしり

長髓彦ハ大和國にハせいんハ東奥ハ其祠あり

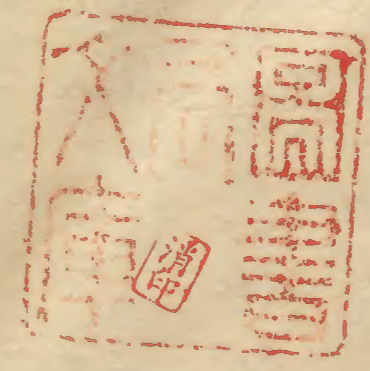
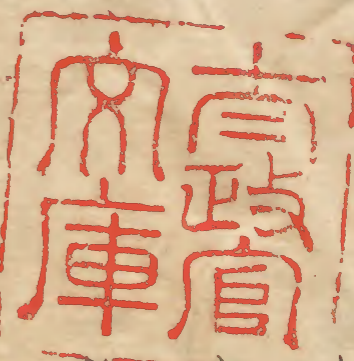
やと曰り社傳をえりれ其縁ありあり
麻志麻知

命ハ神武帝乃勅をうけて長髓彦を殺しハ
其子孫長く去りて東也移り祖廟を建てハ祀を
奉りハ且乃陸奥の凡そ氣ハ定て詳カニ
ハ散そテ其全をえりり

○僧 和俗ハ小間屋かり圖書 二百四十六島夷志ハあり

居停主人 和俗ハ借屋乃家三
類言纂要ノ十二

○出 秋成乃抄多
類書纂要
之十二
餅師 餅屋 上



小世、味増にちり

上回

大の資かしときを 隷利 禪語
倍利 此一字出可あり

や梅すはふ類書纂要ノ四、恰制と云ふはあふし

注、後情の人をいふ、身之なり、
秀過万人、日佳、
梢端好貞

